

ぶらたなす

NO.10

睦月

(むつき)

長井高等学校

図書委員会

図書館

2025.1.30



新年を読書と共に



図書館長より

みなさま、新年を迎えて気持ちを新たに学校生活を送られていることと思います。そんなみなさまに1つ言葉を紹介させていただきます。「おもしろがれる人は何でもおもしろい。何にでも不満を持つ人はどんなにお金があろうとも不満。」これは所ジョージさんの言葉です。読書をあまり面白いと思ったことがない人もいるかと思いますが、読書に限らず苦手意識があることに対して嫌だなと思いながらではなくその中に面白さを見つけられると少し楽しいと思えるかもしれません。本も面白さを見つけることで同じ時間の読書でより多くの発見や充実感を得ることができます。今年は「面白がる精神」、そしてぜひ読書と共に素敵な1年をお過ごしください。

(1-5 図書委員)

押忍！ 図書館長です。さて、君達は、『にほんごであそぼ』(Eテレ)という教育番組をご存じだろうか。今回紹介するのは、その総合指導を務める教育学者・齋藤孝(さいとう・たかし)の、『身体感覚を取り戻す 腰・ハラ文化の再生』(NHKブックス)だ。奥付によると、発行は00年。ちょうど四半世紀前の著作である。齋藤の名を一躍世に知らしめたベストセラーが、本作とほぼ同時期に出版された『声に出して読みたい日本語』(草思社)だが、こちらを読んだことがあるという人は、結構いるかも知れない。

本稿で次に取り上げる作品を何にしようかと迷いに迷い、とりあえず本作を読み返してみていた折しも、齋藤がXで、合気道家・白川竜次(しらかわ・りゅうじ)の動きを「水のように流麗」(2005.01.03)と評していた。実は、齋藤然り、内田樹(うちだ・たつる)。「現代の国語」の教科書の『フェアな競争』の著者)然り、学者には、武術の愛好家が存外多い(という印象がある)。固有の身体と、それを通して得た絶対的な経験(すなわち体験)という不可思議に、学者という生き物の本能が、強く引き寄せられるためだろう。

本作を一口で言い表すならば、「失伝した身体の再発見」だ(「タイトルまんまやんけ」とツッコミを入れたその君、見所があるぞ!)。齋藤が膨大な資料群から探り当てたのは、古き良き日本で生活していた人々の、内と外とに現れ出ていた、文化としての身体である。日々の営みの中で身体から身体へと受け継がれてきた文化は、時代の大波に押し流され、辛くも散逸を免れたものも、資料へと加工され、言説に落とし込まれる過程で、色彩の大半を失ってしまった。それでも本作は、今、ここで、やはり生活している全ての読者に、多くの示唆を与えてくれる。

教育現場もまた、身体疎外の例外ではない。一つでも多くの「腑に落ちる」体験を、君達に伝える。これを私の、今年の抱負としたい。

図書委員のおすすめの本



『ラブカは静かに弓を持つ』

安壇美緒：著
集英社

全日本音楽著作権連盟の職員である橘樹は、ある日上司から呼び出され、町の音楽教室への潜入調査を命じられる。著作権法を侵害している証拠をつかむため、身分を偽り、チェコの指導を受け始める。他人と関わることを避けていた橘が、チェコの演奏や音楽教室での仲間との関わりを通して、徐々に心を開いていく。

この本は、人との出会いや信頼とは何なのかをよく考えさせてくれる一冊だ。チェコを弾く描写も美しいので興味のある人はぜひ読んでほしい。

(1-5 図書委員)